

苦海浄土——もう一ぺん人間に——

石牟礼道子 いしむれみちこ

内容理解

この文章で作者は、水俣病の患者の生を、丁寧な取材に基づき、「使命感」をもって描いている。本文を読み直しながら、空欄に入る適切な言葉を補ってみよう。

（昭和三十四年五月、水俣育ちの「わたくし」は、病院に水俣病患者の坂上ゆきと看護者の夫・茂平を見舞い、水俣病事件を直視し、記録しなければならぬという衝動に駆られ、ゆきの声に耳を傾けた。）

◇「おい、魚のたおるるぞうー」

茂平の網の親方が、ゆきを世話してくれてから発病するまで三年と暮らしていない。目の良かつたゆきが、針を持ちながら、しきりに¹ をこするようになった。ここ二、三年、漁がへつたと集落中が言い出していた。かつては、ほら貝とともに親方の「おい、魚のたおるるぞうー」という声が集落の前の² にひびき渡ると、³ 中が舟を出す。タチや、サワラや、コノシロの大群、海はいつも生きていた。猫たちの妙な死につづいて「ヨイヨイ」に似た病人が、ひそかにできていた。

「うちも、ヨイヨイ病じゃ、なかる、か」

味わったことのないような⁴ が茂平を押し包む。

◇「ぬしが魚じゃ、うんと食え」

茂平は、素性の良さそうな⁵ を選んで刺身を取り、食えという。引きしまっているはずの刺身が妙に頼りない舌の遠くに逃げて、味気ない口ざわりになるのを呑みくだしながら、ゆきは嬉しそうな顔つきをしている。

剛気な網の親方の益人^{ますと}やんの家族三人は、熊大に連れていかれた。⁶ のいなくなった集

落の家々に鼠^{ねずみ}が増えた。茂平に背負われ、リヤカーに便乗させてもらって、村の鍼灸院にきたゆきは、もぐさをつけたまま、呻き^{うめ}声をあげて跳ね上がり、暴れ回り、縁から転げて悶絶^{もんぜつ}した。

語句

この文章の中で使われていた次の言葉を使って、短文を作ってみよう。

律儀（三八五・上7）

素性（三八八・下4）

手応え（三九〇・下18）

一部始終（三九四・上4）

◇ 熊本大学医学部病理学武内忠男教授研究室。

この日武内教授にねがい、一人の女性の解剖に立ちあった。わたくしは一部始終をじっとみていた。彼女の心臓はその心室を切り開かれたとき、慎ましく最後の吐血をとげ、わたくしにどつと、なにかなつかしい悲傷のおもいがつきあげてきた。死とはなんと、かつて生きていた彼女の、全⁷ の量に対して、つつましい営為であることか。

◇ — 死ねばうちも解剖さすよ。 漁婦坂上ゆきの声

うちは⁸ ば見てきたとじゃもん、くまもとの大学病院で。

うちの頭は、おろ良か頭になってしもうて、平気でカイボウまで見れたとやろか。うちも解剖さすやろばってん、⁹ 水銀の毒氣の残るばかりのおろ良か頭の替えられるなら、

頭はスパツとちよんぎつてもろて、こんどは生まれ替わつて、よか頭で生まれてこうごたる。

人間な死ねばまた人間に生まれてくつとじやろうか。うちややつぱり、ほかのもん生まれ替わらず、人間に生まれ替わつてきたがよか。じいちゃんと舟で海にゆこうごだる。うちがワキ槽ば漕いで、じいちゃんがトモ槽ば漕いで二丁槽で、¹⁰ の嫁御になつて天草から渡つてきたんじゃもん。

うちやぼんのうの深かけんもう一ぺんぎつと人間に生まれ替わつてくる。

主 題

この作品で作者はどのようなことを描こうとしたと思われるか、次のことに着目して、百字程度でまとめてみよう。
〈着目点…漁師夫婦の日常とその日常を壊したもの〉

発 展

次の中で興味を持った事項について、図書館の書籍やインターネットなどを使って調べてみよう。

・水俣病は、どのようにしてその原因が究明されたのか。

・現在の水俣は、どのようなになっているか。

・「ぼんのう」とは、どのような思いか。

100